国語科（論理国語）学習指導案

日　時　令和７年 11 月 11 日（火）
第５校時　13：25～14：15
学校名
対　象　第２学年　　組　　名
会　場　３階　　２年　　組教室
授業者

１　単元（教材）名

単元名：比べて読む
教材名：「情報化と紙の本のゆくえ」（『新編論理国語』大修館書店）

２　単元の目標

・　論証したり学術的な学習の基礎を学んだりするために必要な語句の量を増し、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにすることができる。　〔知識及び技能〕(1)イ
・　文章の種類を踏まえて、内容や構成、論理の展開などを的確に捉え、論点を明確にしながら要旨を把握することができる。　〔思考力、判断力、表現力等〕Ｂ(1)ア
・　主張を支える根拠や結論を導く論拠を批判的に検討し、文章や資料の妥当性や信頼性を吟味して内容を解釈することができる。　〔思考力、判断力、表現力等〕Ｂ(1)ウ
・　言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚を深め、言葉を通して他者や社会に関わろうとする。
「学びに向かう力、人間性等」

３　本単元における言語活動

同じ事柄について異なる論点をもつ複数の文章を読み比べ、それらを比較して論じる活動。
（関連：〔思考力、判断力、表現力等〕Ｂ(1)ウ）

４　単元の評価規準

ア　知識・技能	イ　思考・判断・表現	ウ　主体的に学習に取り組む態度
①　論証したり学術的な学習の基礎を学んだりするために語句の量を増し、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにしている。（(1)エ）	①　「読むこと」において、文章の種類を踏まえて、内容や構成、論理の展開などを的確に捉え、論点を明確にしながら要旨を把握している。（B(1)ア） ②　「読むこと」において、主張を支える根拠や結論を導く論拠を批判的に検討し、文章や資料の妥当性や信頼性を吟味して内容を解釈している。（B(1)ウ）	①　情報を的確に比較・整理しながら、複数の考えを比べる活動を行う中で自らの学習の取り組みを調整しようとしている。

５　指導観

（１）　単元観

本単元は、高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）の第２章　第１節　国語　第３　論理国語　２内容〔思考力、判断力、表現力等〕Ｂ読むこと(1)」の指導事項ウ「主張を支える根拠や結論を導く論拠を批判的に検討し、文章や資料の妥当性や信頼性を吟味して内容を解釈すること。」に基づいて設定した。これまでの学習では、一つの文章やひとまとまりの情報の内容を把握することを中心に取り組んできたため、生徒は筆者の主張をそのまま受け入れることが多かった。本単元では、二つの文章を比較し、「どちらの文章により説得力があるか」という視点をもたせることで、主張や根拠の関係を多面的に捉え、内容の妥当性を自らの判断で吟味する力を育てることを目指す。さらに、この活動を通して、批判的に読む力や論理的に考える力を養い、情報を整理・分析しながら自分の考えを形成する力を高めることを目的とする。

（２）　生徒観

本校では第１学年時に「現代の国語」「言語文化」を習得し、第２学年から第３学年にかけて「論理国語」「文学国語」を分割履修している。本クラスの生徒は、全体的な授業中の取り組み状況は良好であり、特にペアワークやグループワークには意欲的に取り組む生徒が多い。一方で論理的な文章については、「堅苦しい」「言葉が難しい」などの理由で、半数以上の生徒が苦手意識をもっている。

本単元までに、「読むこと」における指導で、『具体と抽象』『対比をとらえる』の単元で評論文を構造化して読み、100 字で要約する指導を続けてきた。本単元では初めて二つの文章を比べて読む。「教科書に載っている文章だから筆者の主張は正しいはずだ」と考える生徒が多い中で、二つの文章を比べて読み、どちらの文章がより説得力があるか、妥当性・信頼性があるかについて考える活動を設定することで文章を批判的に読むことへの第一歩とする。

（３）　教材観

本教材は、『比べて読む』の中の「紙の本はなくならない」の次に配置されている。内田樹「紙の本はなくならない」は、電子書籍の出現と広がりという今日的な状況における、「紙の本」についての筆者の考えが述べられた評論文であり、明晰な論理と独自のキーワードを使って自説が展開されている。宇野常寛「情報化と紙の本のゆくえ」は、電子書籍か、紙の本かということだけでなく、情報化による新旧メディアの入れ替わりに伴う、より本質的な問題に触れた評論文であり、「紙の本」については内田との対照性も見える。二つの評論文を比べて読み、情報を整理した後、どちらの筆者の主張に賛同するかを考えられるようにする。根拠も合わせて考えることで、文章を批判的に読むことにつながると考えた。更に「紙の本は必要や不要か」というテーマでディベートを行うことで、「紙の本」について自分自身の考えを深め、最終的に600字の小論文にまとめる。小論文を相互評価することで、更に多くの考えに触れることができる。一つの視点だけでなく、多角的な視点で物事を考える大切さを実感できるよう指導する。

６　年間指導計画における位置付け　（第２学年　「論理国語」　読むこと）

時期	教材名	重点指導事項
1学期	・　論理と出会う 「『論理的』な人とはどういう人か」 ・　具体と抽象 「ウサギの耳はなぜ長い？」 ・　対比をとらえる 「対話の精神」	ア　文章の種類を踏まえて、内容や構成、論理の展開などを的確に捉え、論点を明確にしながら要旨を把握すること。 イ　文章の種類を踏まえて、資料との関係を把握し、内容や構成を的確に捉えること。

2学期	・ 統計資料を活用する 「若者の『海外旅行離れ』は本当か？」 ・ 比べて読む 「紙の本はなくならない」 「情報化と紙の本のゆくえ」	ウ　主張を支える根拠や結論を導く論拠を批判的に検討し、文章や資料の妥当性や信頼性を吟味して内容を解釈すること。 カ　人間、社会、自然などについて、文章の内容や解釈を多様な論点や異なる価値観と結び付けて、新たな観点から自分の考えを深めること。
3学期	・ 思考を深める 「『考える葦』であり続ける」	エ　文章の構成や論理の展開、表現の仕方について、書き手の意図との関係において多面的・多角的な視点から評価すること。 オ　関連する文章や資料を基に、書き手の立場や目的を考えながら、内容の解釈を深めること。

7　単元の指導計画と評価計画（５時間扱い）

過程	時	目標	学習活動	評価規準 (評価方法)
構造と内容の把握	第１時	・ 本文中に出てくる語句の意味を正しく理解し、文章全体の構成上の特徴をつかむ。	1　全文を読み、100 字で要約する。 2　重要語句・難解語句の意味を確認する。 3　第一、第二段落を読み、筆者の言う「本質的な変化」とはどのようなことか考える。	ア―①　語句や漢字の意味を理解し、語彙力を身につけることができる。（小テスト）
精査・解釈①	第２時	・筆者の主張とその根拠を理解する。	1　第三段落を読み、「紙の本」が「骨董品のようなものになっていく可能性が高い」のはなぜか、筆者の考えを整理する。 2　文章全体の論旨をまとめる。	イ―①　論点を明確にしながら、要旨を把握することができる。（ワークシートの記述の分析）
精査・解釈②	第３時 (本時)	・ 二つの文章を比較し、筆者の主張や根拠の妥当性や信頼性を批判的に検討する。	1　「紙の本はなくならない」「情報化と紙の本のゆくえ」という二つの文章について、主張とその根拠を、マトリクス表を用いて整理する。 2　文章を批判的に読み、どちらの筆者の主張に賛同するか考える。	イ―②　主張を支える根拠や結論を導く論拠を批判的に検討し、文章や資料の妥当性や信頼性を吟味して内容を解釈している。(ワークシートの記述の分析)
考えの形成・共有②	第４時	・ 「紙の本は必要か不要か」というテーマでマイクロディベートを行い、自分の考えを深める。	1　「紙の本は必要か不要か」についてマイクロディベートを行う。 2　マイクロディベートで深まった主張・根拠・対立する主張とそれについての反論を構成メモにまとめる。	ウ―①　粘り強く思考を深め、自らの学習の取り組みを調整している。（ワークシートの記述の分析）

考えの形成・共有②	第５時	・「紙の本は今後どうなっていくか」について 600 字で文章を書く。	１　「紙の本は今後どうなっていくか」について文章にまとめる。 ２　他者と共有、振り返りを行う。	イ―②　主張を支える根拠や結論を導く論拠を批判的に検討し、文章や資料の妥当性や信頼性を吟味して内容を解釈している。（小論文の記述の分析） ウ―①　粘り強く思考を深め、自らの学習の取り組みを調整している。（ワークシートの記述の分析）

８　指導に当たって

班テーマ　「生徒が主体的に学べる目標と発問の工夫」

(1)　発問の工夫

二つの文章を比べて読み、「どちらの考えにより説得力を感じるか、理由を考える」という発問を設定した。コの発問によって、生徒が筆者の主張や根拠の違いに注目しながら文章を批判的に読むことができるようにした。単なる内容理解にとどまらず、「なぜそう感じるのか」を言語化することで、思考の深まりと主体的な読みを促すことをねらいとした。

(2)　授業形態の工夫

中心発問をもとに、生徒が自らの考えを形成・発展させることができるよう、グループでの話し合い活動を取り入れた。どちらの筆者の主張に賛同するかを話し合い、理由を交流することで、多様な視点に触れながら自分の考えを再構築できるようにした。また、役割を明確にすることで、全員が主体的に参加しやすい環境づくりを行った。

(3)　ワークシートの工夫

二つの文章の比較においては、マトリクス表を用いて主張・根拠などを整理し、思考の過程を可視化できるようにした。また、毎時間振り返りシートを記入し、自らの学習の取り組みを調整できるよう指導した。

９　本時（全５時間中の第３時間目）

(1)　本時の目標

二つの文章を比較し、筆者の主張・根拠の妥当性や信頼性を批判的に検討する。

(2)　本時の展開

時間	学習活動	指導上の留意点	評価規準(評価方法)
導入 5 分	１　前時の復習をする。 ２　本時の学習課題を確認する。	・　これまで取り組んできたことと本時の目標を共有し、授業の見通しをもつ。 ◎二つの文章を比較し、筆者の主張・根拠の妥当性や信頼性を批判的に検討する。	
展開 ① 20 分	１　文章を「批判的に読む」とはどういうことか考える。	・　初めに個人での活動を設定し、ペアで共有できるようにする。 ・　「批判的に読む」とは、「書かれている内容を鵜呑みにせず、筆者の主張に対する論拠の信頼性・妥当性や他の結論が導ける可能性	

		などを検討しながら読むこと」であると確認する。	
	2　二つの文章の筆者の主張とその根拠について、表を用いて整理する。	・　４～５名のグループを作り、役割分担を決める。（発表者・進行役・記録・タイムキーパー） ・　マトリクス表に筆者の主張とそれを支える根拠をまとめ、整理する。 ・　支援の必要な生徒にはこれまでの授業プリントや要約プリントなどを参考にするよう伝える。	
	3　グループで共有する。	・　はじめに個人で思考する時間を取り、その後グループで共有する。 ・　記録係は表をタブレット端末で撮影し、オンラインホワイトボードに投稿することを指示する。	
	4　全体で共有する。	・　いくつかのグループに発表させる。 ・　宇野常寛は「紙の本は不要だ」と述べているわけではないことを理解できるよう生徒の言葉を価値付けながら進める。	
展開 ② 20 分	1　二人の筆者の主張を読み比べてみて、どちらの筆者の主張に賛同するか、理由とともに考える。	・　どちらの筆者の主張に賛同するか、またその理由も合わせて考えるよう指示する。 ・　なんとなく、で選ぶのではなく、二人の筆者の主張を支える根拠の中で、より説得力が高い、妥当性が高いと感じるものを挙げ、説明するよう伝える。	イ―②　主張を支える根拠や結論を導く論拠を批判的に検討し、文章や資料の妥当性や信頼性を吟味して内容を解釈している。（ワークシートの記述の分析） 【「十分満足できる」と判断できる状況の例（A）】 二つの文章から必要な情報を取り出し、適切に比較することによって、本文の根拠の妥当性や説得性を確かめながら自分の考えを形成している。 【「おおむね満足できる」と判断できる状況の例（B）】 二つの文章から必要
	2　グループで意見を共有する。	・　はじめに個人で思考する時間を取り、その後グループで共有する。 ・　グループで出た意見は、ワークシートにメモするよう指示する。 ・　時間に余裕があればいくつかのグループに発表させる。	

			な情報を取り出し、適切に比較することによって、自分の考えを形成している。 【「努力を要する」状況の例（C）】 二つの文章から必要な情報を取り出し比較することができていない。 【「努力を要する」状況（C）に対する指導の手当て】 ワークシートのマトリクス表を用いながら、筆者の主張と根拠を再度整理し、どちらに賛同するか、理由とともに考えられるようにする。
まとめ 5分	1　本時の内容について振り返り、整理する。	・　振り返りシートに、本時で学んだことを記入するよう指示する。 ・　次回は「紙の本は必要か不要か」というテーマでマイクロディベートをすることを予告する。	

(3)　板書計画



比べて読む「情報化と紙の本のゆくえ」

・目標
二つの文章を比較し、筆者の主張や根拠の妥当性や信頼性を批判的に検討することができる。

・「批判的に読む」とは？
「書かれている内容を鵜呑みにせず、筆者の主張に対する論拠の信頼性・妥当性や他の結論が導ける可能性などを検討しながら読むこと」

(4)　授業観察の視点

・　生徒は文章を批判的に読むという目標を達成できていたか。
・　グループ学習により生徒は自らの考えを広げることができていたか。
・　振り返りシートを用いて生徒は自らの学習の取組を調整し、主体的に学習を進めることができていたか。

令和７年度東京教師道場（２年次）　　国語　　高等学校１班

研修の概要

１　東京教師道場について

４名の部員と１名のリーダーと担当教授からなる班で、主に授業観察と協議からなる授業研究を行う２年間の研修である。

<table>
<tr><td rowspan="3">１年次</td><td colspan="5">第１期　把握・点検期</td><td colspan="2">第２期　発展・充実期</td></tr>
<tr><td>第１回
授業研究</td><td>第２回
授業研究</td><td>第３・４回
授業研究</td><td>夏季集中協議
（班）</td><td>夏季集中協議
（組）</td><td colspan="2">第５～10 回
授業研究</td></tr>
<tr><td>教職員研修
センター</td><td>リーダーの
所属校</td><td colspan="5">部員及びリーダーの所属校等</td></tr>
<tr><td rowspan="3">２年次</td><td colspan="2">第２期　発展・充実期</td><td colspan="5">第３期　自立・完成期</td></tr>
<tr><td>第 11 回
授業研究</td><td colspan="2">第 12～14 回
授業研究</td><td>夏季集中協議
（班）</td><td>夏季集中協議
（組）</td><td>第 15～19 回
授業研究</td><td>第 20 回授業研究</td></tr>
<tr><td>教職員研修
センター</td><td colspan="5">部員及びリーダーの所属校等</td><td>教職員研修
センター</td></tr>
</table>

・　２年間で３回、学校種を越えた授業研究を実施した。

・　夏季休業期間には、夏季集中協議として、模擬授業や授業力の自己診断に基づく協議、教材や実践事例の紹介等を行った。

２　班での取組及び班テーマについて

<table>
<tr><td>第１期

把握・
点検期</td><td>高等学校１班の班員が所属する学校は、生徒の実態が多様であり、それぞれの実態に応じた「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて検討・協議を重ねた。その中で、生徒の言語活動を充実させるためにペアワークやグループワークを取り入れるなど、協働的な学びの実践を進めた。また、一人１台端末をはじめとするＩＣＴの効果的な活用を模索し、オンラインホワイトボード等により個々の活動をクラス全体で可視化することを実現するなど、活用の幅を広げた。
一方で、生徒の思考を深める課題設定や発問の工夫が不十分であること、また対話的な活動において話し合いが深まらないことが課題として挙げられた。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">第２期

発展・
充実期</td><td>「生徒が主体的に学べる目標と発問の工夫」</td></tr>
<tr><td>第１期の授業研究においては、基本的な指導技術やＩＣＴ機器を活用した学習活動について検討し、その工夫と実践を重ねることで、協働的な学習を促す授業づくりを意識できるようになった。しかし、生徒がより主体的に学びたいと感じられる課題設定や、中核となる発問の工夫については、多くの部員が苦慮した。また、対話的な活動が、生徒同士で書いた内容を読み合うだけにとどまり、学びが深まらないという課題も残った。
そこで第２期では、こうした課題を踏まえ、単元の目標設定とそれに対応した中核発問について協議・検討を重ねた。授業実施に際しては、年間指導計画や単元計画を踏まえ、育成したい資質・能力を具体的に想定した上で目標を設定し、生徒の実態に応じた発問を工夫した。授業研究では、これらの目標や発問について繰り返し協議・検討を行った。
また、対話的な活動においては、従来の「書いたものを発表する」形から改め、〈個人思考→グループでの話し合い→クラス全体での共有→意見を言語化〉という流れを導入した。これにより、対話の中で考えを深めることが可能となった。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">第３期

自立・
完成期</td><td>「生徒が主体的に学べる授業の工夫」</td></tr>
<tr><td>第２期終了後の夏季集中協議において、これまでの成果と課題を点検した。その結果、第２期に設定した班テーマについては引き続き取り組む必要があると判断し、「生徒が主体的に学べる授業の工夫」をテーマとして協議・検討を継続した。さらに、「指導と評価の一体化」を実現する方策についても検討を深めた。</td></tr>
</table>

	授業研究においては、目標と評価を対応させ、「おおむね満足できる状況（B)」の具体例を明確化することを意識した。また、育成すべき資質・能力を焦点化し、評価場面を具体的に設定することで、評価規準の明確化・具体化を進めている。

３　成果と課題

		成果	課題
授業力の６要素	使命感、熱意、感性	生徒にどのような力を身に付けさせたいか、目的をもって授業を行うことができた。授業研究で得た学びを生かし、授業改善に努めることができた。	学習指導要領の趣旨を踏まえ、生徒にどのような力を身に付けさせたいか検討し、授業を計画する。今後も授業改善に努める。
	児童･生徒理解	生徒の発達段階や学習状況を踏まえ、指導計画を立てることができた。また、多様な生徒に対する手立てを用意し、授業に臨むことができた。	学習意欲の低い生徒、努力を要する状況（C）の生徒に対する手立てが不十分なケースがあったため、よく生徒を観察し、状況把握に努める。
	統率力	授業規律や基本的な学習ルールを定着させることができた。明確な指示を行い、集団をまとめることができた。	言語活動の時間、個人思考の時間など取り組むべき活動を明確に指示し、メリハリをつけた授業展開になるよう意識する。
	指導技術（授業展開）	授業の始めに目標を明確に示し、学習の見通しをもたせることができた。発問を工夫し、主体的・対話的で深い学びを意識した授業を行った。	より良質な発問を投げかけられるよう、授業者自身も学ぶ姿勢をもち続ける。導入部分で意欲を引き出すことができるような工夫を行う。
	教材解釈、教材開発	生徒の興味･関心を引き出す教材開発を意識して授業準備を行った。学習指導要領の目標や内容を理解し、教材分析に取り組んだ。	より専門的な教材研究、教材開発が行えるよう日頃から自己研さんに努める。学校や地域の特色を生かした教材開発を行う。
	「指導と評価の計画」の作成・改善	内容や時間のまとまりごとに、目標と観点別の学習状況について評価する場面や方法を設定することができた。	単元、授業ごとに目標と評価が正対しているかを常に意識する。おおむね満足できる状況（B）を具体的にイメージしながら指導計画を立てる。